

3 課

4月18日

イエスと使徒たちの聖書観



安息日午後 4月11日

今週のテーマ

暗唱聖句

イエスは答えて言われた、『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言ことばで生きるものである』と書いてある。(マタイ4:4、口語訳)

イエスはお答えになった。『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。(マタイ4:4、新共同訳)

今週の聖句

マタイ4:1～11、22:37～40、ルカ24:13～35、44、45、4:25～27、使徒言行録4:24～26

残念ながらこのポストモダンの時代に、聖書は、その靈感も権威も疑問視する哲学というレンズを通して大幅に再解釈されてきました。それどころか、聖書は、現代の私たちがのようにこの世界を理解してなかった、かなり原始的な文化の中に生きていた人たちの考えにすぎないとみなされています。同時に、超自然的な要素は軽視されるか、あるいは場面から取り除かれ、聖書は人間についての神の見解ではなく、神についての人間の見解の文書になりました。そしてその結果、聖書は多くの人にとって、進化論的思想と現代哲学の時代にほとんど無意味なものとなってしまったのです。

しかし、私たちはこのような立場をまったく認めません。その代わりに私たちは、新約聖書の中でイエスや使徒たちが旧約聖書(当時、彼らが持ちえた唯一の聖書)をどのように理解したのかを研究することで、聖書全体に対する霊的見方を見いだすことができます。彼らは、記されている人々や場所や出来事をどのように受け止めたのでしょうか。彼らの解釈上の前提と、それに続く解釈方法はどのようなものだったのでしょうか。それは、靈感を受けていない人たちの誤解とは大いに異なります。靈感を受けていない人たちの前提は、神の言葉について懐疑と疑いしかもたらしません。

イエスがバプテスマのヨハネからバプテスマを受けられたことで、救い主の働きは始まりました。その後、イエスは“霊”に導かれてユダの荒れ野へ行き、そこで（最も弱り切った人間の状態の中）サタンの誘惑を受けられました。

問1 マタイ4：1～11を読んでください。荒れ野でのサタンの誘惑から、イエスはどのように御自身を守られましたか。このことから、私たちは聖書についてどのようなことを学ぶことができますか。

食欲によって誘惑されたとき、イエスは、『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある』（マタ4：4）とお答えになりました。イエスは、生ける言葉とその究極的な聖なる源を指摘されたのです。このようにして、彼は聖書の権威をお認めになりました。この世の王国と栄華で誘惑されたとき、イエスは、『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある』（マタ4：10、ルカ4：8）とお答えになりました。真の礼拝は（ほかのだれでもなく）神に焦点を合わせるものであり、神の言葉に従うことは真の礼拝であるということ、キリストは私たちに思い出させておられます。最後に、自己顕示欲と思いがりで誘惑されたとき、イエスは、『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある』（マタ4：7、ルカ4：12）とお答えになりました。

これら三つの誘惑すべてにおいて、イエスは「聖書に書いてある」という言葉で応じられたのです。つまり、サタンの攻撃と欺きに対処するために、イエスはほかの何物でもなく、真っ先に神の言葉に頼られたのでした。このことは、私たち全員にとって説得力のある教訓です。聖書、そしてただ聖書だけが、私たちの信仰の究極的な基準、基礎なのです。

確かに、聖書、ただ聖書だけが、敵の攻撃に対するイエスの防御策でした。イエスは神ですが、サタンに対する防御において、神の言葉だけに従われたのです。それは意見でもなく、入り組んだ複雑な議論でもなく、個人的敵意の言葉でもなく、単純ではあるけれども深い聖書の言葉です。キリストにとって、聖書は最大の権威と最大の力を持つものでした。このようにキリストの働きは、確かな基礎を伴って始まり、聖書に対する信頼の上に打ち建てられ、進められたのです。

どうしたら私たちは、神の言葉に従うとともに、それに頼ることができるようになるのでしょうか。

問2 マタイ 5：17～20、22：29、23：2、3 を読んでください。これらの聖句の中で、イエスはどのようなことをおっしゃっていますか。

イエスは弟子たちに、神の言葉と律法に従うように教えられました。イエスには聖書の権威や妥当性に対する疑いが微塵もありません。それどころか、神の権威の源として、絶えず聖書に言及しておられます。イエスはサドカイ派の人々に、「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている」（マタ 22：29）と言われました。聖書とその教えを単に知的に知るだけでは、真理を知るのに不十分であり、重要なのは真理である主を知ることだと、イエスは教えられたのです。

問3 マタイ 22：37～40 は、モーセの律法に対するイエスの見方について、どのようなことを教えていますか。

イエスは律法の専門家へのこの言葉の中で、1500年ほど前にモーセに与えられた十戒を要約なさっています。イエスが旧約聖書の律法をいかに重視し、それを最も高い次元にまで高めておられるかに、私たちは気づく必要があります。多くのクリスチャンは、新しい律法がここで与えられており、従って旧約聖書の律法は今や新約聖書の福音に置き換わっている、と間違った結論を下してきました。しかし実際、イエスが教えておられることは、旧約聖書の律法に基づいています。キリストは律法の覆いを取り、それをもっとはっきり示されました。それゆえ、(人間と神の関係に焦点を合わせた前半の4条と、人間同士の関係に焦点を合わせた後半の6条に要約して)「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」（マタ 22：40）と言われたのです。このようにイエスは、「律法全体と預言者」と言うことで、旧約聖書全体をも高めておられます。なぜなら、その言葉は、「律法」「預言者」「諸書」という旧約聖書の三つの区分全体を言いあらわすものだからです。

「キリストは、聖書が疑問の余地のない権威書であることを指摘されたが、わたしたちもそうすべきである。聖書は、無限の神の言葉であって、あらゆる論争の解決とすべての信仰の基礎であることを示すべきである」（『希望への光』1199 ページ、『キリストの実物教訓』16 ページ）。

どのような競合する権威の源（家族、哲学、文化など）が、神の言葉に従おうとするあなたに対抗する可能性がありますか。

**問4 ルカ 24：13～35、44、45 を読んでください。イエスは聖書をどのよう
に用いて、弟子たちに福音のメッセージを教えておられますか。**

キリストが亡くなられたあと、弟子たちは困惑し、疑いの中にありました——「どうしてこんなことになってしまったのか」「これはいったいどういうことなのか」。ルカ 24 章の中で、イエスは弟子たちのために二度（最初は、エマオの途上にあつた 2 人の弟子の前に、続いてほかの弟子たちの前に）姿を見せておられます。イエスはそれぞれの機会に、いかにすべてが旧約聖書の預言の成就であつたかを説明しておられます——「そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された」（ルカ 24：27）。

ルカ 24：27 で、「聖書全体」とははっきり言及されていることに注目してください。この点はルカ 24：44 でも、「律法と預言者の書と詩編」と再び強調されています。このことは、イエスが、つまり肉になつた言ことば（ヨハ 1：1～3、14）が、聖書の権威を信頼しておられたことを明確に立証しています。その権威を信頼して、これらのことが何百年も前にどう預言されていたのかを説明されたからです。聖書全体に言及することで、イエスは弟子たちに手本を示しておられます。福音のメッセージを広めるために出て行くとき、弟子たちも聖書全体の意味を解き明かして世界中の改宗者に理解させ、力を与えねばならないのです。

またマタイ 28：18～20 で、イエスは当時の弟子たち（と現代の私たち）に、「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」（マタ 28：18）と言っておられますが、その言い方にも注目してください。「わたしは……授かっている」と言っておられますが、その権威は、父なる神と三位一体の神全体に根差し続けているのです。なぜなら、イエスは弟子たちに、「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け……なさい」（同 28：19、20）と言っておられるからです。そして次に、重要な言葉が続きます——「あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」（同 28：20）。イエスは何を教え、何を命じておられるのでしょうか。彼の教えは聖書全体に基づいています。イエスが来られたことは、御言葉の預言の権威に基づくことであり、イエスが父なる神に服従されたのは、聖書の預言の成就としてでした。

イエスは聖書全体を受け入れられましたが、なぜ私たちも同じようにしなければならないのですか。また、すべてのことが必ずしも現代の私たちに適用できないとわかっていても、どうすれば聖書全体の権威を受け入れることができるようになるのでしょうか。

聖書は神の言葉であると、イエスは教えられました。それは、聖書に書かれていることは、神が言われたのと同じであるという意味でした。聖書の起源は神の中に見いだされ、そこには人生のあらゆる局面に関する最高の権威が含まれています。神は歴史を通して働き、聖書によって御旨を人類に示してられました。

例えばマタイ 19：4、5で、イエスはモーセによって書かれた文に言及しておられるのですが、その箇所を取り上げて、次のようにおっしゃいます。『『創造主は初めから人を……お造りになった。』そして、こうも言われた。『それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる』。『聖書にはこうも書いてある』と言う代わりに、『『創造主は初めから人を……お造りになった。』そして、こうも言われた……』と、イエスはおっしゃって、創世記の語り手の書いたことを創造主の言葉とみなしておられます。つまり、この言葉を書いたのはモーセですが、ここでは神が書き手とみなされているのです。

問 5 次の聖句を読んでください。聖書の歴史的人物や出来事を、イエスはどうに理解しておられましたか。マタイ 12：3、4、24：38、マルコ 10：6～8、ルカ 4：25～27、11：51

イエスは一貫して、旧約聖書の人物、場所、出来事を歴史的事実として扱っておられます。数ある歴史的人物たちの中でも、創世記 1 章、2 章、創世記 4 章のアベル、供えのパンを食べたダビデ、エリシャなどが言及されています。イエスは昔の預言者たちの苦しみについても、繰り返し言及なさっています（マタ 5：12、13：57、23：34～36、マコ 6：4）。警告のメッセージの中で、イエスはノアの時代についても描写しておられます——「洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。そして、洪水が襲って来て一人残らずさうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである」（マタ 24：38、39）。イエスが神の裁きというこの壮大な業を歴史的な出来事として言及しておられたことは、間違いありません。

イエス御自身がこれらの歴史的人物たちを實在のものとして言及しておられるのですから、そのことは、今日多くの人々が（クリスチャンと自称する人でさえ）否定するサタンの欺きの力について、何を教えているのでしょうか。なぜ私たちはそのわなに陥ってはならないのですか。

新約聖書の記者たちは、イエスと同じように聖書を扱っています。教理、倫理、預言の成就に関して、旧約聖書は権威ある神の言葉でした。彼らの言動のどこにも、聖書のどこかの部分の権威や信ぴょう性を疑っている様子は見いだせません。

問6 次の聖句は、使徒たちが神の言葉の権威をいかに理解していたのかということについて、何を教えていますか。使徒言行録4：24～26、13：32～36、ローマ9：17（口語訳）、ガラテヤ3：8

これらの聖句の中で、聖書が神御自身の声といかに密接に関連づけられているかという点に注目してください。使徒言行録4章において、聖霊に満たされる直前、弟子たちは、ペトロとヨハネが救出されたことのゆえに神を賛美しています。その賛美の中で、彼らは声をあげて神を創造主として認め、僕であるダビデを通して語ってくださったことを感謝しています。つまり、ダビデの言葉は神の言葉なのです。使徒言行録13：32～36では、再びダビデの言葉がパウロによって引用されていますが、彼の言葉は神によるものとされています。なぜなら、「神が先祖たちに対してなされた約束」と32節（口語訳）に書かれているからです。

ローマ9：17（口語訳）は、だれもが主語として神を予想するところですが、パウロは「聖書」という言葉を用いて、「聖書はパウロにこう言っている」と述べています。実際には、「神はパウロにこう言っている」と記すことができるでしょう。ガラテヤ3：8でも、「神」の代わりに「聖書」が主語に用いられており、そのことは、神の言葉が神御自身と密接に結びつけられていることを示しています。

実際、新約聖書の記者たちは、旧約聖書を神の言葉として一様に信頼しています。新約聖書の中には、旧約聖書からの引用文がたくさんあります。ある学者は、イザヤ書から400、詩編から370、出エジプト記から220というように、具体的に2688か所の引用一覧リストを作成しました。もしこのリストに、間接的な言及などを加えるなら、数は大幅に増えるでしょう。新約聖書の書卷は、旧約聖書の預言への言及であふれており、しばしばそれらの引用箇所には、「こう書いてある」という言葉が伴っています（マタ2：5、マコ1：2、7：6、ルカ2：23、3：4、ロマ3：4、8：36、9：33、Iコリ1：19、ガラ4：27、Iペト1：16）。このことはすべて、旧約聖書がイエスや使徒たちの教えの基礎であったことを裏づけているのです。

これらの例から、聖書の権威に対する私たちの信頼を失わせる考えがいかに危険であるかということについて、私たちは何を学ぶべきですか。

参考資料として、『各時代の希望』第7章「子供として」、第12章「試み」を読んでください。

「人は、神の言葉よりも、神よりも、自分たちのほうが賢いと考える。そして、不動の土台の上に自分の足を置いて、神の言葉という試金石で判断する代わりに、神の言葉を科学や自然に関する人間の考えによって判断し、もしそれが彼らの科学的考えと合致しないように思えるなら、信用に値しないものとして捨て去るのである」(『サイエンス・オブ・ザ・タイムズ』1884年3月27日号、英文)。

「御言葉の中に啓示されている神の知恵と目的に深く精通した人たちは、精神的強さを身につける。そして彼らは、偉大な教育者イエス・キリストとともに有能な働き人になるのである。……キリストは御自分の民に真理の言葉をお与えになり、すべての人が、その言葉をこの世に知らせることにおいて役割を果たすように召されている。……その真理、その言葉を除いて、聖化はない。それゆえ、すべての人がそれを理解することがなんと重要であろう！」(『キリスト教教育の基礎』432ページ、英文)。

話し合いのための質問

- ① もしイエス、福音書の記者、そしてパウロたちが、旧約聖書を神の言葉として扱っていたのであれば、私たちはこのことから、なぜ現代の聖書観が間違っているのか、(たとえだれが教えていようと)なぜこういった意見を信じるべきでないのかということについて、何を学ぶべきですか。
- ② 現代の多くの聖書学者が懐疑心から行き着いたことを伝えるために、彼らが否定することを列挙します。文字どおりの6日間の天地創造を認めず、代わりに何十億年もの進化を受け入れている。墮落前の世界における罪なきアダムを認めない。世界規模の洪水を認めない。文字どおりのアダムが存在したことを認めない。出エジプトの物語を認めない。イエスの(肉体を伴った復活を含む)さまざまな奇跡を認めない。(時として数百年、あるいは数千年も前に預言者が未来を語るという)予言的預言を認めない学者たち。私たちはこれらの結論から、聖書の権威と信ぴょう性を疑い始めるときに人々に起こることについて、何を学ぶべきですか。また、そのような人たちが真理をはっきり理解できるように助けるには、どうしたらよいのでしょうか。
- ③ 火曜日の研究の最後の質問に答えて、聖書全体が(現代の私たちには必ずしも当てはまらない部分さえも)靈感を受けていることを、私たちはどのように理解したらよいのでしょうか。